

みよた未来人

町長対談

第3回 まちの縁側なから代表 齋藤百合子さん



さいとう・ゆりこ 1954年御代田町(児玉)生まれ。小諸高校から京都産業大学を経て、京都で結婚、学習塾講師を務める2007年に御代田町に戻り、三ツ谷のグループホーム「さくちゃん家」2階で学習塾をスタートさせた。11年にかつての父親の建てた平和台の住宅を改修し、小学生～高校生向けの自習主体の学習塾を始め、「なから」の活動も開始。ヨガや編み物の教室、障害者就労に関する勉強会などを開く傍ら、18年に月2回のこども食堂を始め、地域の世代間交流の重要な拠点に育ってきている。

Profile



元新聞記者の小園町長が、御代田町の未来、そして長野の、日本の未来を担うキーパーソンと語り合います。第3回は、平和台でこども食堂や生活支援、各種学習会を催しているNPO法人「まちの縁側なから」の齋藤百合子さんです。これまでの活動が認められ、「なから」の活動が日本財団の「子どもの貧困対策第三の居場所」事業に採択。今後さらに活躍の度合いが増していきそうです。

世代が交ざる家庭的空間を

—以前、子ども食堂にお邪魔した時、スタッフの大人はもちろん、高校生ボランティアの子たちの動きも雰囲気もすごく良くて驚かされました。齋藤「主に上田高校ボランティア班や長野大学の皆さんですね。子ども食堂を続けていくうちに、子ども同士のグループに入れず孤立する子が出るこ

とありますが、そういった子を見つけたら誰かがスツと自然に入っていく。素晴らしいと思います。彼らの力も借りて子どもたち一人一人の心にしつかりと向き合っていると

場所、というイメージですが。齋藤「「なから」では、大人が食事を一時的に提供するというよりは、子どもを含むみんなで調理をして片付けることを基本としており、お楽しみで来るお子さんが多いです」

—困っているお子さんはそんなに多くない？。齋藤「他町の先生のお話です



「なから」建物



対談の様子



こども食堂の様子

が、週末食べられないのか、月曜日、給食をかきこむ児童がいるそうです。困っているお子さんは確実にいます。ただ、私たちの活動だけで困っている子どもたちにはアプローチするのは難しい部分もあります」

—子どもの貧困はどのようにして起きているのでしょうか。齋藤「生活するのに十分な賃金を得られない社会構造に問題があるとは思いますが、優先順位が食事よりスマホや服装等に移ったのも一因だと思います。また、店で買ってきた総菜をそのまま食卓に出す親は我が子どものころ出始めたのですが、今はまったく調理ができない親も増えていて、食費の割に栄養バランスの取れていない家庭も増えているように感じています」

—子どもと高齢者の交流はスムーズにいきましたか。齋藤「子どもたちが下にお茶飲みに行つて高齢者とお話をしたり、よもぎ団子と一緒に作ったりと、とても良い関係性が生まれました」

—「なから」でも、編み物勉強会など大人や高齢者が入ってきやすい工夫がありますよね。さて、日本財団の事業採択に関してはどう受け止めていますか。齋藤「本年6月から3年間で



小園町長と齋藤百合子代表